

如水会寄附講義「社会実践論」講義要綱（2008年度冬学期）

講義責任者：山崎秀記

2008年10月7日（火）オリエンテーション

14時40分 東2号館 2201番教室

如水会寄附講義「社会実践論」では、産業界等、社会の第一線で活躍されている本学の12名の先輩の方々が、週1回ずつ（火曜4限）オムニバス方式による講義をされます。

皆さんが、将来の職業選択を軸に大学でこれから何を如何に学ぶかを考える指針となるように、現在第一線で活躍されている諸先輩に、「学生時代に何をしたか」、「社会に出てどういう転機があったか」等自らの体験を交えてお話しいただきます。講師の方々は、自分の歩んでこられた、そしていま歩んでおられるところから、社会を、日本を、あるいは世界を切り取って皆さんにわかりやすく提示し、皆さんが、現代社会とそこでの社会実践のあり方を個別具体的に考える機会を与えてくださることでしょう。

皆さんは、1回きりの講演をただ聞くというだけでなく、先輩の生き方や考え方にふれて触発されたものを質問や感想・意見として返し、ともに考え学ぶ場を作り出してください。

なお、本講義は、如水会および一橋大学の学問風土の活性化を目指して故永井正（22学）氏が寄附された基金をもとに運営されている一橋大学後援会「キャプテン・オブ・インダストリーを考える委員会」からの資金提供によって運営されています。

講義日程

第1回 10月14日（火）



テーマ：一橋の精神と風土

講師：大澤俊夫 東京商科大学・昭和27年卒
元NECリース（株）会長

講義内容

一橋大学は、明治8年（1875年）に、私塾商法講習所として、生まれてより133年の歴史を経て、今日の我が国屈指の社会科学の総合大学に発展するまでに至った。しかしその道程は平坦なものではなかった。数回にわたる学園存亡の危機があったが、その都度全学が一致して闘い、克服してきた。しかもその間、常に本学は、我が国の経済社会の近代化の先駆者として、学問と実践の両面にわたって有為な人材を輩出してきた。このような本学の活力を産み出してきたものは何であったのか、その「精神と風土」について語り、併せて、本学の建学の精神を体現する言葉「キャプテンズ・オブ・インダストリー」の現代的意義について言及したい。

第2回 10月21日（火）



テーマ：無償性について——私の出会った詩人、作家、美術家、そして

講師：平出 隆 社会学部・昭和51年卒
詩人・作家・多摩美術大学教授

講義内容

幸運にも大学在学中から、当時の「新世代の詩の書き手」として活動できた私は、優れた詩人や画家と若くして交流を持つことができました。卒業後、文芸出版社の編集者となることで、さらに多くの、歴史に残る作家たちに出会いました。ことばや芸術の無償の力を信じつつ単独で未踏の精神の仕事をする人たちでしたから、経済の原理からは大変に遠いところを、私もまた、彼らに導かれつつ歩いてきたこととなります。

こんなふうに一橋出身らしくない私ですが、じつは反面、在学中に組織し33年になる草野球チームの「経営者」として、プロのスター選手たちを巻き込んできました。長嶋茂雄、豊田泰光、稲尾和久、レロン・リーなどの往年の名選手たちや「アメリカ野球殿堂」までを無償で、わが草チームへ躍り込ませた秘策についても触れましょうか。

第3回 10月28日(火)

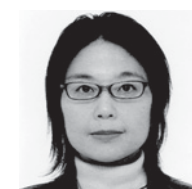


テーマ：アメリカとヨーロッパの違い
講師：福島清彦 経済学部・昭和42年卒
立教大学経済学部 教授

講義内容

私は高校の最終年に、経済の勉強をしたいと思うようになり、一橋に入学しました。一時は学者になろうかと思い、大学院に入りましたが、やはり実社会に出て仕事をしたいと思い直し、大学院は修士で終わりました。毎日新聞経済記者を8年、野村総研を研究員として27年勤め、定年になり、4年前から立教大学で経済政策論を教えています。3度目の職業ですが、読書し、取材し、考えがまとまればものを書いてゆくという点では一貫性のある職業選択だったと思います。この間、計12年海外生活をしました。一橋大学で学んだこと、多くの優れた友人に恵まれ卒業後も励まされてきたことが、私が何とかやってこれた原因だと思います。そんな経験談が、学生諸君の参考になればいいと思います。

第4回 11月11日(火)



テーマ：創る！福祉行政 一時代のトレンドを見据えて—
講師：松田美恵子 社会学部・昭和57年卒
東京都児童相談センター保護課 課長補佐

講義内容

東京都に入って最初の仕事は、都立病院の事務でした。都に病院があることも、病院に事務仕事があることも知りませんでした。時あたかも老人保健法が施行され、老人医療費無料時代が終焉を迎えた時期です。その日を境に会計窓口の高齢者の長蛇の列ができるのを目の当たりにし、当時は、まだ目立たぬ領域だった福祉・医療は行政の中でこれから必ずスポットライトを浴びると直感したのでした。それから25年、その勘は当たったと言ってよいでしょう。

社会に役立っていると直接感じられる仕事をしたい、女性が一生働き続けられる仕事をしたい、と思って入った地方行政の道は予想以上にクリエイティブで幅広いものでした。その経験をお話します。

第5回 11月18日(火)



テーマ：私の転機と日本の中小企業
講師：前嶋修身 商学部・昭和42年卒
前嶋修身税理士事務所代表 税理士

講義内容

私の人生の転機の一つが、一橋を卒業後5年間勤めた信託銀行を退社し、コンサルタント業の小さな会社(コンピュータ計算と税理士事務所を併設)で働きながら早稲田大学大学院に進んだことでした。大学時代はマーケティング論を、早稲田では経営学を専攻し、現在税理士事務所を開設しています。その間、城西大学では租税関係の非常勤講師を10数年務めました。税理士会役員としては、国際部門及び規制緩和対策部門で責任者となりました。日本ファイナンシャル・プランナーズ協会(会員16万6千人)は昨年創立20周年を迎えましたが、創立以前からのメンバー(当時70名)でありFPの日本への導入には力を尽くしました(現在 監事)。

税理士事務所では従業員とともに、大企業と違い優秀なスタッフのいない地場中小企業150社の税務経理を含む経営全般のアドバイスを日夜行っています。上場した会社もあれば、倒産した会社もあります。皆さんの就職の視野に入っていないであろう日本の中小企業と税理士の仕事、そこでいかに大学、大学院での勉強とその後の体験が役に立っているか、の面白い話をしたいと考えています。

第6回 11月25日(火)



テーマ：これからのゼネラリスト

講師：島崎 大 商学部・平成14年卒

トリンプ・インターナショナル・ジャパン株式会社

プロダクト・マネージメント1部 商品企画1課 課長

講義内容

私は、大学に入学する前から「わくわくする商品をつくる仕事がしたい」という希望を持っておりました。この希望が叶い、入社後2年目に、「小悪魔ブラ」という新ブランドの商品開発を任せられ、その後もブラジャーやショーツの開発に携わっております。

繊維製品を開発する過程は、デザイン、製糸、生地編み立て、染色、縫製などの専門技術から成り立っていますが、私は、これらの専門技術を大学までに学んでいたわけではありません(ちなみに私はCRIMSON出身です)し、もちろん自分でこれらの製品を使用したこともありませんでした。

このような場面においても、私たちが貢献できる働き方のひとつとして、ゼネラリストというキャリアについてご紹介できればと考えております。

第7回 12月2日(火)



テーマ：地方・中小・同族企業で働く

講師：中原晋司 商学部・平成11年卒

中原水産株式会社 常務取締役

講義内容

皆様の中には、ご実家が事業経営をされている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

私の実家は、中原水産という同族企業で、鹿児島県枕崎市において水産物卸・加工業を営む中小企業です。

一橋大学入学、経営コンサルティング会社への就職、そしてベンチャー企業へ転職・・・自身の進路決定には、いつも家業の存在が大きく影響していました。そして、今まさにその家業で働いています。

世の中多種多様な職業の選択肢がある中で、なぜ家業で働くのか、地方の中小企業に未来はあるのか、自身の経験とそ

の時々に考えていたことを振り返りながら、お話しできればと思います。

第8回 12月9日(火)



テーマ：作るキャリア，出来ていくキャリア

講師：古森 剛 社会学部・平成3年卒

マーサー ジャパン株式会社 代表取締役社長

講義内容

転職が普通のこととして認知され始めたのが、ちょうど私の世代あたりからでしょうか。91年のバブル崩壊とともに社会に出て、その後二度転職をしました。昨今では、「キャリアをいかに作るか」という左脳のキャリア観が多いのですが、私個人的には、「キャリアは出来ていくもの」と考えています。細かい設計やプランよりも、持つべきものは「自分の生き方」だと思います。私の場合、出会いを恐れず飛び込むこと、直感に躊躇しないこと、そして、オンでもオフでも心技体の限界までやることを大事にして生きています。座右の銘は、「日々決算」。空手に情熱を傾けた大学時代のことも振り返りながら、40歳になって思う仕事や人生のことについて、未熟者の身ながらお話をさせていただきます。

第9回 12月16日(火)



テーマ：商社のイノベーション

講師：宍戸 潔 商学部・昭和55年卒

三菱商事株式会社 イノベーションセンター 事業開発部長

講義内容

私は、就職に際し自分の長所は「機を見るに敏」、「実行力」であると考え、商社を選びましたが、その選択は間違っていなかったと思います。商社は歴史的に不要論が出る度にそのビジネスモデルを変革し業容を拡大して来ました。私が三菱商事に入社した1980年頃は仲介事業者といっても良い存在であった商社は現在では総合事業会社として事業投資に軸足を移しています。そして三菱商事は更なる進化を遂げる為に2007年4月にイノベーション事業グループを新設しました。私の担当業務を例に商社のイノベーションとは何かをお話したいと思います。

第10回 1月13日(火)



テーマ：「公私混同」のススメと、「95年問題」

講師：松丸淳生 社会学部・平成7年卒

株式会社集英社 UOMO 編集部 主任

講義内容

学生時代の僕は、旅と本と、いろんな人の話を聞くのが大好きで、それを仕事にできたらいいなと思って編集者になりました(非常にシンプルな「公私混同」です)。一方、僕が入社した「1995年」は、年始めに震災とオウム事件が発生し、以降、急速に社会不安が広まっていきます。僕は愛すべき“俗っぽい”男性誌(パート、プレイボーイ、ウオモ)の編集を続けながら、さまざまな分野の魅力的な方々に出会うと同時に、安全神話の崩壊、ネット・ケータイ化の影響、格差拡大といった、いま盛んに論じられている問題群が成り立つさまを「現場」から垣間見てきました。今回は、そんなお話をしつつ、僕たちの「未来」についても思いをはせたいと考えています。まあどんな時代も、楽しく働くには「明るい公私混同」がいちばんと思っていますが(笑)。

第11回 1月20日(火)



テーマ：企業法務弁護士の役割と今後の展望

講師：石黒美幸 法学部・平成元年卒

長島・大野・常松法律事務所 パートナー

講義内容

テレビドラマなどでは困った人を助けたり、無実の罪を晴らしたり、悪者を懲らしめたりという伝統的な姿の弁護士達が活躍しているが、その一方で現実の世界では、企業の国内外における様々な活動に裏方としてあるいは時には企業の経営者とともに表舞台に立って活躍する企業法務を専門分野とする弁護士が多くなってきた。クライアントの要求水準も高く、出来て当たり前の世界で、時間と戦いながら大量の書類を精査し、作成し、助言するというストレス度の高い仕事ではあるが、ダイナミックで面白い案件に触れることが出来るのもまたこの仕事である。17年前、仕事の内容もよく分からないまま、男女差別がなく、前向きな仕事が出来るという理由で企業法務弁護士の道を選んだ私であるが、その選択に後悔はない。益々業務が拡大し、従来の弁護士とは違った役割を期待されるようになった企業法務弁護士の姿を皆さんにお話ししたいと思います。

第12回 1月27日(火)



テーマ：総合商社—グローバル企業への道程

講師：吉田元一 商学部・昭和46年卒

三井物産株式会社 代表取締役副社長

講義内容

大学時代から海外を志向し、卒業後、日本と世界の国々を結ぶ貿易に携わってみたいとの思いで三井物産に入社した。総合商社は、世界に類のないユニークな業態であり、日本の「貿易立国」の担い手として、貿易を通じて戦後の日本経済の発展や日本の産業・企業の海外進出に貢献する役割を果たしてきた。然しながら、この間、貿易の中身は大きく変わり、日本産業は加工貿易型からグローバル展開に移行し、その中で総合商社の役割も大きく変わって来ている。

入社以来、総合商社は、「商社冬の時代」「商社不要論」と呼ばれる時代を幾度となく経験してきた。その都度、外部環境の変化に合わせて自らを変革し成長してきた当社の「挑戦と創造」の過程を、自らの体験を通して、直接、学生の皆さんに語りかけてみたい。